20230530 町田市 CM 連絡会研修 グループワーク用事例

【事例の概要】
A さん 85 歳 女性 長男長女がいる。
65 歳まで、30 年間調理師として勤め上げた。
夫は他界し、一人暮らし。二人の子どもに恵まれ、近所の人もうらやむほどの夫婦仲であった。
骨折による入院中にもの忘れ、理解判断力の低下がみられ、退院後に要介護 1 の認定を受ける。
退院後に専門医通院し、アルツハイマー型認知症の診断。
短期記憶の欠如あり、火の不始末によりシンクには焦げた鍋がよく置いてある。
その場その場での意思決定、自身の意向を伝えることはできるが取り繕うような会話が多く、本心は分からない。
ガスコンロは、長時間放置することで自動消火されるものの、2～3 ヶ月に 1 回程度、消防車がくる。
知人友人は、本人だけでなく近隣への被害が出ないか気をもみ、毎日様子を見に来る。

自宅は、農業を営んでいた夫(故人)が建て、築年数もまだ浅い。
夫と過ごし、夫がのこしたこの家で庭の手入れをしながら暮らしたいと、明確な意向あり。
調理は仕事としてやってきたけど、趣味でもある。いまも自分では楽しみにしている。
電磁調理器を使ったほうがよいと色々な人に言われるけど、調理しにくいし、操作も難しそうなので使いたくない。楽しみがなくなってしまう。

長男は車で2時間ほどのところで生活。就労に忙しく、休みは週 1 日。毎月 2 回訪問している。
火の不始末による火事が心配なので、電磁調理器に変えたいが、母は色々な理由をつけ、使用できないと納得しない。どうすればよいか分からない。
警察や消防からも「施設にいれてはどうか」と言われ、主治医にも「認知症は治らないし、これからもっと大変になる」と言われている。
父が残した家と土地を売却すれば、直ぐに入れるような施設でも当面生活できるので、近所の家に被害がでないうちに、施設へ入ることも考えていきたい。

海外で生活する長女は、毎日母に電話をかけている。
話がかみあわないことがあり、入院前と母の様子がかわったことはよく理解し、何もできない歯がゆさも感じている。
火の不始末の話をすると、「あなたまでそんなこと言わないで」と怒り、泣いてしまうのであまり言えない。

グループワークで以下の3点について、気づいたことの意見交換をします

【1】ケアマネと長男のやり取り

ケアマネ：息子様の不安もごもっともです。今一番防がなければならないのは“火事”だと思うので、ご本人を説得して、早急に電磁調理器を導入しませんか？
機械に慣れるまではヘルパーさんと一緒に調理したり、配食サービスなどを活用しましょう。
施設も直ぐは入れないので、火事を予防しながら今後のことを考えて行きましょう。

長男：「既に警察や消防、友人の方々にも迷惑をかけているので、自分が何とか説得します。」

ケアマネ：失礼ですがAさんは認知症もありますし、まずは息子様の判断で電磁調理器に変更することが、Aさんのためにもなると思います。

【2】本人と長男のやり取り

長男：「友人の方や自分たちの心配もわかってほしい。ケアマネさんも話してたけど火事が起こってしまったら、思い入れのあるこの家自体がダメになってしまうんだよ。気持ちはわかるけど、電磁調理器に代えてくれ。電磁調理器だって料理はできるだろ」。
「おれも仕事が忙しくて、何かあっても直ぐに来れない。これ以上大変になったら施設にお願いすることになるかもしれないよ」。

本人：「…。」

【3】その後の経緯

その後、電磁調理器の導入が行われた。
当初はうまく使えないこともあってか、本人より「以前のままが良かった」との声も聞かれたが、ヘルパーと一緒に電磁調理器を使用するなどし、次第に使用できるようになっていった。「失火の心配はなくなった」と長男より感謝の連絡が入り、施設入居の話も出ていない。